

検証 JR革マル浸透と組織私物化の実態！

民主化闘争情報[号外] 2010年7月27日 発行 日本鉄道労働組合連合会(JR連合)【No.135】

「JR革マル組織は消滅した」との主張には大きな矛盾！

前号では、元東労組中央執行委員の本間雄治氏（現JR労組委員長）の陳述書を基に、1997～1999年にJR内の革マル派グループの責任者的地位にあった田岡耕司氏が、その時期、革マル派のカンパを集め党中央に渡していたことを検証した。ところで、田岡氏はJR内革マル派が「1999年12月に革マル派中央との関係を絶った」と述べる一方、本間氏が「少なくとも自分が会議に出席していた2002年までは、JR内革マル派のカンパが集約されていた」と述べているのは矛盾している。本間氏によれば、カンパ集約等の活動は2000年以降も続いていたという。カンパ金が党中央に渡っていないなら、どこにいったのか。

JR総連側や田岡氏は「革マル派との関係は最終的に絶った」「(JR内の革マル派のグループは)1999年12月をもって最終的に消滅した」と言っているが、仮に革マル派中央との関係を絶ったとしても、JR内の革マル派グループの組織、方針、活動は、実質的に今もなお継続されていると考えるのが自然だ。つまり、実態は変わっていないのに、自分たちはJR内に存続するグループ(組織)を「革マル派」と呼んでいないだけのことではないのか。ここに「現在は革マル派との関係はない」との詭弁を追及する鍵がありそうだ。

JR総連は松崎氏の革マル派ペンネーム(倉川篤)を身内から暴露！

「JR革マル派43名リスト裁判」で原告のJR総連側が6月30日に提出した準備書面を紹介し、さらに徹底して検証を進めていきたい。この書面には、東労組元会長の松崎明氏が国鉄内に革マル派としての組織をつくった経過が、以下の通り述べられている。

第2 国鉄・JR内の革マル派グループとしての組織と運動の編成(甲17)

はじめに 組織は、人間がつくるものであり、それを構成、関与するもの一人ひとりに歴史があり、事情がある。その変転も、人によってさまざまであり、画一的にまとめきれものではないが、以下総体的にまとめることとする。

1 国鉄内に革マル派としての組織をつくったのは原告松崎であった。

(1) 原告松崎は、家が貧乏だったこともあり、社会の動きには早くから関心を持っており、高校生のときに「共産党宣言」を読むなどして影響を受けて、日本共産党に入った。ところが党の会議でソ連に対して感じた疑問を述べたところ、他の党员から嘲笑され、疑問を持つこと自体を非難された。そんななかで黒田寛一氏の著作に出会い、新鮮な感動を受け、黒田氏の思想に関心が湧き、黒田氏を中心とした学習会に参加するようになった。この学習会に参加するうち、自然に黒田氏を中心にしてつくられた革命的共産主義者同盟(革共同)に関与するようになり、この革共同が何度か分裂し、1963年には革マル派と中核派に分かれた。原告松崎は、中核派幹部の労働運動の引き回しに反対して革マル派に加わり、その際、革マル派に参加した労働者が原告松崎一人であったため、副議長を引き受けた。「副議長」といっても実態はそのようなものであり、革マル派結成宣言に名(倉川篤)を出したくらいで、革マル派の副議長として何らかの活動を担ったということはない。

革マル派創始者の「副議長」が「何らかの活動を担ったということはない」とは到底信じ難い。松崎氏は、これまでも革マル派結成に関与し副議長を務める最高幹部だったと認めてきた。「倉川篤」は、立花隆著「中核VS革マル」でも記載される松崎氏の有名なペンネームだが、身内が暴露したのは初めてではないだろうか。

「検証・JR革マル浸透と組織私物化の実態！」はJR連合ホームページに掲載中！ <http://homepage1.nifty.com/JR-RENGO>